文献紹介

Saad, ‘The Moral Inadequacy of Cremation’

概要

本論文は、イギリスの生命倫理学者である著者が、近年西洋でも一般的になりつつある「火葬(cremation)」に対して倫理的懸念を主張するものです。著者はイギリスにおける火葬に関わる実践を念頭に置いた上で、火葬は社会的記憶や帰属意識、死の適切な理解といった共同体にとっての重要な価値を失わせてしまうだけでなく、遺体の持つ象徴的な価値を損うため倫理的に望ましくなく、したがって西洋の伝統的な葬法である「土葬(burial)」が選択されるべきだと論じます。

プロジェクトとの関係

現代ではますます多様な葬法や遺体の扱い方が実践されるようになってきていますが、もしかするとその中には倫理的に望ましくなく、場合によっては法的に規制されるべき種類のものがあるかもしれません。火葬が倫理的に不適切だという著者の議論が十分に説得的であるかはともかく、葬送の倫理について考えるための重要なファクターがいくつも示されている点で示唆的な論文です。

キーワード：火葬、土葬、社会的記憶、帰属意識、遺体の尊厳

Toni C. Saad, ‘The Moral Inadequacy of Cremation’, *The New Bioethics*, 23.3 (2017), pp. 249–60.

西洋社会における火葬

伝統的にみると、西洋ではキリスト教的背景から、遺体を棺桶に入れて埋葬する土葬が支配的でした。火葬が一般的に行われるようになったのは比較的最近のことで、19 世紀のイギリスで公衆衛生上の問題と土地不足の問題を解決する手段として提唱されたのが始まりだとされます。

20 世紀後半以降、ヨーロッパにおいても主に現実的な利点から火葬を選択する人が増えてきています。イギリスのような比較的国土の小さい国では埋葬地の不足が深刻な問題となっており、土葬を選択する遺族は大きな経済的負担を強いられることになっています。これに対して、火葬は比較的低コストであり、経済的な観点からみて優れた選択肢であると言えます。更に、土葬には地下水の汚染に代表される環境上のリスクが指摘されている一方、現代の火葬で水銀やダイオキシンのような汚染物質が排出されるリスクは極めて低いことが明らかになっており、環境への配慮という観点からも火葬の方が優れています。このように、火葬は西洋の伝統的な葬法である土葬と比べて明確な実利的利点を有しています。

火葬によって失われる価値

そうしたメリットにもかかわらず、著者は火葬には深刻な倫理的懸念が挙げられるとし、土葬を選択すべきだと主張します。

まず著者は、伝統的な埋葬墓地が社会的記憶の場として重要な役割を果たしてきたと主張します。伝統的な教会墓地は、地域の人々に先人たちの存在を思い出させ、いつかは自分もそこに葬られるのだという意識を育むことで、共同体への帰属意識を生み出してきました。しかし、遺体を火葬し、残った遺灰は公園墓地に撒くという現代イギリスの葬法のもとでは、死者が共同体全体の社会的記憶から姿を消してしまうと著者は主張します。墓地は家族が故人を偲ぶための物理的な拠り所であり、共同体全体にとっても、故人がその重要な一員であったことを示す視覚的な証となるため、失われるべきではないとされます。

さらに著者は、墓地が「死を想え(*memento mori*)」という重要な教訓を人々に与える公共の場であることを指摘します。著者によれば、現代社会では日常生活から死が遠ざけられ、死を意識する機会が少ない傾向にありますが、火葬は遺体を共同体の外へと追いやることによってこの傾向を更に加速させます。現代のイギリスでは、火葬後の遺灰を自宅に置き続けたり、場合によっては遺灰を連れて旅行に行ったりする実践が見られますが、著者によればこのような葬法はあくまで故人をコミュニティから切り離された個人として記憶するものに過ぎず、故人が亡くなってしまった現実を否定する虚構に陥る危険性があり、問題があるとされます。

火葬と遺体の価値

こうした社会的価値の喪失に加えて、著者は火葬が遺体の持つ尊厳を損なうと論じます。

遺体をどのように扱うべきかという問題は、わたしたちが人間と身体についてどのような理解を持っているかと深く結びついています。著者は、現代の西洋で火葬が一般に受け入れられている背景には、人格は意識に宿るという人間理解があると主張しています。この考え方によれば、意識を持たない遺体は人格が抜け去ったあとの抜け殻でしかないということになります。しかし著者はこの見方に異を唱え、人間の心と身体は分かちがたく結びついた統一体であると主張します。すなわち、遺体は単なる抜け殻ではなく、故人の人格と深く関わる固有の価値を持った特別な存在であり、それに見合った適切な扱いがなされるべきだとされます。著者の考えでは、わたしたちが死体性愛（ネクロフィリア）に嫌悪感を覚えるのは、それがこうした遺体の価値を冒涜するものだと直感的に理解しているからだとされます。

この人間観・身体観のもと、著者は、火葬は（死体性愛のような冒涜行為とまでは言えないにせよ）遺体を単なる廃棄物として扱う葬法であり、人間の身体が持つ尊厳という象徴的価値を毀損するため倫理的に問題があると論じます。

以上の理由から、著者は、火葬ではなく土葬の方が倫理的に望ましい葬法であると結論づけます。

コメント

火葬は倫理的に望ましくないという著者の議論は興味深いですが、いくつかの疑問も浮かびます。

第一に、著者が指摘する社会的記憶の喪失という問題は、火葬それ自体というよりも共同体墓地が失われることに由来するものに過ぎないように思われます。火葬した遺骨を安置する日本の標準的な墓地や納骨堂も著者の言う社会的記憶の場としての役割を担うことができます。付け加えると、伝統的な墓地の継承や維持が困難になりつつあると指摘される現代社会において、社会的記憶の場としての共同体墓地という

著者の理想が本当に成り立ちうるのかという現実的な懸念も挙げられます。

第二に、遺体に固有の尊厳があるという著者の主張は、心と身体の関係についての独特な想定に基づいており、議論の余地があります。

以上のような疑問はあるものの、社会的記憶や遺体それ自体の尊厳といった倫理的価値に基づいて葬送の望ましさについて考えなければならないという著者の提案には学ぶべきところがあります。葬送にあたって最低限満たすべき倫理的な条件（ハードル）としてどのようなものがあるかは今後検討されるべき重要な課題と言えます。

鈴木英仁
京都大学大学院文学研究科・研究員

SMBC京大スタジオ「誰もが生・死後の尊厳を保つための持続可能な身じまい・意思決定とその支援」プロジェクト（幸せなしまい方PJ）ではさまざまな領域の意思決定を対象として文献調査を進めています。詳細はプロジェクトのウェブサイトと調査報告アーカイブをご覧ください。
ご意見・ご感想はinfo@ethics.bun.kyoto-u.ac.jpまでお願いいたします。